

柏樹

題字
 南 勇 会長
 川口市退職校長会
 会報 第12号
 平成28年2月1日

教育支援について

前会長 浅香正男



本年度全国学力テストの埼玉県公立小中学校児童、生徒の正答率は、すべてにわたり全国平均を下回った。小学校47都道府県中39位、中学校は34位前後の平均正答率。実に惨たんたる状況で、元市立川口高校の教頭であった関根郁夫県教育長は、早急に取り組む学力改善策の作成・実施を各市町村教委に要請した。

さて、本市の状況は、更に深刻である。小学校は、県平均とほぼ同水準であるが、中学校においては、全ての項目が県平均をも下回った。中でも国語B、理科の調査項目は全国平均と比べて特に低い状況である。

言うまでもなく、学校だから学力の不振は、見過ごすわけには行かない。本会は、学校支援を目的に掲げてきた

ところであるが、この現状は、かつて学校の最高責任者として、学校の管理運営を行ってきた者の集まりであるから自らの責任と自覚し、痛切な反省をもって対処しなければならない。

学校支援で注意したいことは、権威的に上からの目線でものを言うのではなく、現職の方々の身になって、一緒に考え、支援することである。分けても、初任教員指導や適応指導に当たっている会員には、模範授業を多くやって欲しいものである。

学校評議員、評価委員等に携わる際は、私達現職時からの積み重ねの結果であることを弁えて、具体的に、実践できる支援をして欲しい。

教育相談や講師として、子供達への講話等も積極的に引き受けて欲しい。学校応援団、学校公開、授業参観等にもすすんで参加し、教員への励みと緊張を与えて欲しい。

地区別支援体制は、居住地、勤務歴等を勘案し、10地区に学校を分担して支援する組織で、全国的にも話題となったが、研究発表会等には積極的に参加し、成果となって現れることを期待

している。
 8月末には、「川口市教育振興等に関する提言書」を市長、議長、教育長あてに提出した。川口市の子供達のために、緊急、適切な予算処置を是非願いたい。

二つの故郷

杉内 トシ



いつの頃からか「私には愛する二つの故郷がある」と、ふっと思ってしまうようになりました。

一つは生まれ育った福島県、そして今も無事に生活している埼玉県です。福島県での生活は中学校勤務4年を含め30年弱でしたが、埼玉県では教職として30年余、退職してもう20年ですから50年余になります。年数では埼玉の方がずっと長いのですが、あなたの故郷はと問われたらどちらとも甲乙つけ難いのです。

川口市で昭和40年から小学校に勤めさせていただき、多くの方々にお世話になり思い出もたくさんあります。初めての勤務校では1年生担任になりました。中学校経験しかない私にとっては

ギャップが大きく戸惑いの日々でした。特に学習面で、易しいことほど教えることの難しさを痛感したことなど、今でも思い出して苦笑しています。それから30年余、紆余曲折ありましたが、いつも周りの方々に導き支えていただき無事終えることができました。退職後も、変わらない温かい御交情のお蔭で楽しく生活できていますことに感謝しております。

「兔追いしかの山：「ふるさと」は、今でも世代を超えて多くの場で歌われており、他にも故郷を想う歌や格言などたくさんあります。それだけ故郷は誰にとっても郷愁があり、様々な想いの馳せるものなのでしょう。

歌詞のとおり小鮎釣りし小川をはじめ、駆け回った田んぼや山など、自然との触れ合いの多かった子供時代でした。また何十年経っても会えば話が弾む同級生等が、忘れ難き福島になっていくのです。遠き昔はすべてが良き思い出なのでしょうか、教職生活でも先生も生徒も保護者も、余裕と温かさがあつたように思われます。

情報網や刺激が少なくゆつたりし過ぎた感がある福島、少しは成長しなさいと育てて頂いた埼玉、どちらにも感謝の気持ちで一杯です。

過去も大事、今も大事、私には愛する二つの故郷があることに大変満足しています。

—ちよつといい話—

子どもを支える環境

大高満美子

この夏、大阪で中1の生徒2名が巻き込まれる痛ましい事件が報道された。しかも、ごく普通の生徒であり、ラインで繋ながっているから大丈夫と親も認め、深夜や未明に外出して徘徊していたと言うから、なおさら衝撃的なニュースだった。

そこで記憶によみがえってきたことは、退職しても続いていた、かつて私に関わった児童の中で長く気に留めていた子だった。

その子は朝になると、登校を渋り、母親が付き添って登校していた5年生の女兒。学校ではいろいろ対応をして保健室登校が始まり、やがてそれが校長室登校に移ってきた縁で、卒業までに何回かおしゃべりに応じていた。私はもっぱら聞き役でろくに指導もできなかったが、担任や友達が気遣い、チャンスを見ては手を差し伸べてくれ教室に戻る事ができた。中学生になって、手紙が頻繁に届くようになった。当時は今どきのように携帯やスマホが普及していなかったが、もともと文を書くことは好きなのであった。中学校での様子、友達ができたこと、家族

とのやりとり等々、こと細かく丹念に書かれていた。ピンクの便箋や封筒に時にはプリクラが入っていることもあった。そのうち、高校進学を控えて不安や、迷い、悩み等が増えていった。

まもなく高校入学して自転車通学になったこと、容姿や進路など話題は尽きなかった。その頃、思いがけず家族に不幸があり、悲痛な胸のうちが綿々と綴られており、悲嘆にくれる姿を想像すると、眼がしらが熱くなり、涙で文字が読めなくなってしまった。それから介護関係の仕事に就いたとの知らせを境に、しばらく文通は途絶えた。

そして昨年、久しぶりに届いた年賀状では姓が変わっていた。よく見ると、アドレスも以前とは異なっていた。信頼できる人生のパートナーを得て幸せに暮らしているとのこと・・・。

この子の成長過程をみると、本人の努力は勿論だが、家庭・学校・地域社会の連携のもと、多くの方々の支えや見守り、指導が功を奏した例だと思ふ。昨今の社会や時代の著しい変化に伴い、その様相も複雑多岐になっており、従来通りの施策や対応では問題解決は困難なのかも知れない。

それにしても、高齢になっても元教師であった性(さが)をいつまでも引きずり、子どもに関わる報道には耳を傾ける自分に苦笑している。

耳に助けられ

山口和伸

『ちよつといい話』私事で申し訳ありませんが書かせていただきます。

「先生ありがとうございます。味方になってくれて。」「ありがとうございます。うちの子を支えてくださって。」

長年教員生活を続けてこられた先生方は、多くの感謝の言葉を聞いてこられたと思います。私も感謝の言葉を数多くいただける幸運な教員生活でした。縁あって川口市に於いて数々の特別支援教育推進事業に携わらせていただきました。そのことが多分に幸運につながっているのだと思います。

私は障害児教育が専門という訳ではありません。『生きる力』を構築する学校教育全体に特別支援教育の視点を導入しようとして行錯誤を繰り返してきただけです。実はその背景に、私の出生が関係しています。

私は耳が若干不自由で、補聴器無しでは生活できません。近頃は恥ずかしくも無くなったので、周囲の方にはそのことを知らせるようになりました。この困りものの耳ですが、生まれつきのもんです。しかも、それは耳だけの問題ではありませんでした。

私は1700グラムに満たない未熟児で生まれました。約1カ月の間保育

器の中に居たようです。その際、幸い網膜症にはならなかったのですが、重い中耳炎となり、入院した後も長期の治療が必要となりました。聞こえが悪くなった要因です。さらに身体も丈夫では無く、小学校低学年までは頻繁に医者通いだっただのを記憶しています。

そして生まれ月は3月。未熟児のひ弱な3月生まれは友人に背丈も運動能力も追いつきません。学習も全く自信が無くなりました。成績はクラスで最下位。いじめなど日常茶飯事でした。

紆余曲折はありました。しかし、思えばそれが逆に『教師』を志すことに繋がりました。聞こえの不自由さが特別支援教育と繋がっていききました。思いがけず未熟児で生まれたことが、思いがけず耳が不自由であったことが、逆に幸福な教員生活に繋がったのです。

苦勞して私を育てた母に大いに感謝したいところです。ただ、私が未熟児として生まれたのには理由があります。実は医師が出産を1カ月間違ってしまったのです。あと1カ月お腹にいれば、母も苦勞せずに済んだのに・・・。

最近改めてこのことを母に聞くと、「言わなかったけれど、医者が謝って出産費用ほとんどまけてくれたのよ」と。私は60歳。論語で言う『耳順』(人の言うことに素直に聴けるようになる歳)という歳ですが、『寝耳に水』。素直にこの話を聴けないような・・・。

日々雑感

退職して10年

鈴木成雄

「光陰矢の如し」とはよく言ったものです。退職して10年が過ぎ、来し方を振り返ると月日の経つ速さに驚かされます。退職直後はこれまでとは違う時間を過ごそうと決めていました。いろいろと考えた末に「整体師」の道を選びました。何事によらず奥は深いものです。およそ9年間整体師として大勢の方々との関わりを持ってました。その間たくさんのことを学びました。それまでの体験の如何に狭く、知識の少ないかに驚くと同時にどれ程世間の常識とかけ離れた生活を送ってきたかも考えさせられました。正に馬齢を重ねたと言えましよう。「人生70年、古来稀なり」と杜甫が言った時代と異なり、取り巻く環境や生活条件が違う昔々と比べることには無理があるものの、わが身を忘れ周囲に実に多くの年寄りがいることにも驚きます。近くのスーパーマーケットではたくさんのお年寄りが時季を分かつ目につきます。自分もその一人であることを忘れて・・・

たのです。やはりあちこちに年齢相当のガタがきていたようです(自分では決して認め難くそれなりの自信もあつたのですが)。そこで又、更なる方向を考えました。柄にもないボランテイアの道です。我が家の猫のひたい程の庭木の世話もままならないのに「街の緑サポーター」の道です。半年の初級クラスを終了し1年間の上級コース研修に入りました。教師生活をスタートした安行の地が研修場所でしたがまた何かの縁でしょうか。週1回ですが緑の中、奇特新多くの仲間と共に充実した研修の日々です。世の中には本当に純粹且つ奇妙な方々がいるものです。これ又目を開かされます。講師の先生方は皆熱心で草花樹木を心から愛でそれらを正に我が子や家族同様に思っけいらつしやるようです。「この子はね・・・」こうされるのが嫌いなんです。」と草花を指して研修生に語りかけます。その熱心さに思わずマイ剪定ばさみや木ばさみを購入しました(必需品)。「夏花壇の播種、竹垣製作、松のみどりつみ、刈り込み、日本庭園の管理、夏花壇の鉢上げ、腐葉土の積み替え、夏花壇の定植、日本庭園の管理等々」実に多岐・多方面に亘つての内容です。とても素人の手には負えない内容でした。それでも講師の熱意に沿うべく研修にいそしみました。今年1月の閉講式まで頑張らねばと自身に鞭打ち取り組みまし

英国(ロンドン)の小学校

秋山恵子

私は退職してから、延べ半年余り、ロンドン郊外に住む孫の幼稚園・学校への送迎と、体験入学や保護者参観等に参加了。そこで垣間見た、学校の様子や日本との違いをお伝えしたい。イギリスでは、満4歳の9月から学校に通う。ここで1年間、幼稚園とは異なる小学校入学前の教育が行われる。今秋、孫も晴れて1年生になった。学校は、毎日8時45分から3時10分まで。これは中学・高校もほぼ同じである。一クラス30人。担任は毎年代わるが、クラス替えはない。入学式はなく、初日からお迎えは3時10分だ。余談だが、猛暑の日本で夏休みを過ごした孫は、昼寝の習慣が抜けず、昼休みに教室で寝てしまったそうだ。制服(半袖ポロシャツとトレーナー、グレーのズボンと靴下、黒色の靴)に身を包み、連絡帳と絵本(音読の宿題)が入った学校指定のバッグ(3年から自前のリュック)と水筒を持ち、保護者と登校する。教科書や筆記用具は学校の物を使用し、家には持ち帰らない。教育費(含む給食)は全て無償である。

また、制服やバッグは普段着よりも安価で、地域のスーパーで購入できる。衣替えはないので、夏でも肌寒い日は、半袖の子もいれば、トレーナーやコート姿の子もおり、実に様々である。働く親のために、有料で朝食や軽食が用意され、朝は7時45分から、放課後は5時45分まで預けられる。また、年2回実施される保護者との二者面談は、夜8時まで組まれている。1年生の教室には、6人用の机が5台あり、そこで学習する。体育もあるが、プールはない。週1回、放課後1時間、クラブ活動が行われている。ランチルームでの給食や昼休みは、教員以外の職員が担当する。日本と同じ長期休業の他に、毎学期10日間の休みがある。何とも羨ましい限りである。欠席については厳しい。家庭の都合で数日休む時は罰金を支払う。移民や難民の親が、子どもにきちんと学校教育を受けさせるために、近年で来た規則らしいが、孫の友達は叔母の結婚式に出席するために、罰金を支払って、2週間、母の母国に帰ったそうだ。時々、町探検やスーパーで買い物体験をする小学生のグループを見かける。路線バスに、校外学習に行く児童が乗り込んで来る。ロンドン中心部の博物館や美術館では、小中学生の集団によく出会う。引率の先生と子ども達の様子を見ていると、国や習慣が違っても、子ども達の学習意欲や態度は、先生次第だなど、現役時代を懐かしく思い出す。

学校と地域の架け橋となる

納涼祭復活

川口市立小谷場中学校

校長 赤川 富男

はじめに、現在学校教育においては、地域の力をいかに取り込み、相互交流を図るかが課題の一つになっています。本校は6町会が基本学区となっています。各町会では、夏には盆踊りを実施していますが、本校と隣接する上谷町会は、4年前までは本校を会場にして盆踊りを行っていました。しかし、4年前の東日本大震災以後は、震災犠牲者の追悼と本校の耐震工事から盆踊りを取りやめていました。そこで、本校生徒から「納涼祭を復活して欲しい」との後押しもあり、上谷町会の役員に納涼祭の復活を提案すると共に、学校もできる限り運営に協力することで、納涼祭を復活する運びとなりました。

実際の手順は、上谷町会役員と本校生徒会役員とで協議を重ねることで、復活への道筋に繋げることができましたものと思います。飲食関係の店は町会で、会場設営・出し物・ゲーム等は学校が担当することとなりました。出し物では、地域の方々の大正箏の演奏、折り紙教室、さらに、



本校生徒によるソーラン節踊り、音楽部による琴の演奏を披露でき大変盛り上がりました。上谷町会は、あまり大きくはありませんが、当日は、子ども

小学生、大人を合わせて約500名程の来場があり、楽しんでいただけましたのと思えます。また、ゲームは各学級が、総合的な学習の時間を活用して、1学期末から準備してきました。内容もストラックアウト・フリースロー・ボーリング・ヨーヨーすくい・金魚すくい・輪投げ等があり、生徒が運営して行うことができ、多くの小学生や子どもたちと楽しく交流することができました。生徒の感想からも「地域の方々と交流が出来てよかった。」「ゲームを通して、小学生や小さな子ども達と交流できてとても楽しいものでした。」等が多く寄せられました。生徒が生き生きと活動している姿を見ることができたことも収穫の一つです。また、町会の方々からも賞賛の言葉をいただく

ことができ、何よりも実現できて良かったことと、来年度の実施に弾みできたことです。

日本の伝統である祭りや盆踊りは、地域を一つにまとめる行事として意義あるものです。それに、学校として関わることで、学校と地域との絆が深まったように思います。特に、準備段階から地域の方々と生徒が話し合いを重ね、一つのものを作り上げていくことで、相互理解が進み、体験活動を共有することで、地域の方々を身近な存在として意識することができました。この納涼祭の中には、ゲームを通して小学生の交流があり、本校の委嘱研究である「小中連携教育」のねらいが組み込まれています。



結びに、この納涼祭では、地域の喜び、生徒の喜びと二重奏を奏でることができ、まさに学校と地域の絆を深める架け橋となつたことを実感いたしました。さらに、町会だけでなく本校PTAや

教育後援会からのご支援によって実現したことに深く感謝しています。現在、学校だけで教育を完結することは不可能な時代となっています。そこで、この納涼祭の取り組みは、国が進める「学校を核とした地域魅力事業」における「子どもたちが提案するまちおこし策」の一環になるものと考えます。人づくり・地域づくりは、地域の将来を担う子どもを育成し、学校を中心とした地域力の強化を図ることになります。今後ともさらなる工夫・改善を図りながら、このような地域連携及び小中連携を継続したいと考えています。

編集後記

学校公開に出かけた。「歌を読み、古今集の特徴をまとめよう」中学3年の授業である。黒板の横にはプロジェクターで歌を映し出している。画面が変わる毎に音声が響く。初年から映像を毎時間活用する実践を5年間継続している。生徒が歌・古今集・自分・授業に向き合う姿に感動と驚きを覚えた。言葉を大切に、課題も明確な授業であった。人事の季節、来年は他市へ異動。成長して川口の児童・生徒に力を付ける日が来ることを願う。

(田代博人)